

このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

脇田 久 伸 氏

(Hisanobu WAKITA)
(福岡大学名誉教授)

1942年東京都に生まれる。1966年東京農工大学工学部工業化学科卒業、1969年東京教育大学大学院理学研究科修士課程修了、1972年同大学大学院理学研究科博士課程修了、同年4月福岡大学理学部講師、1975年同助教授、1982年ストックホルム王立工科大学博士研究員、1985年福岡大学理学部教授、分析化学担当、2013年同定年退職、福岡大学名誉教授、佐賀大学シンクロトン光研究センター特命教授、名古屋大学未来社会創造機構招聘教授。この間、2006年「新規X線分析装置の開発とこれを用いる溶存金属イオンの局所構造と電子状態の研究」に対し日本分析化学会学会賞受賞、2008-2009年日本分析化学会副会長、2010-2012年同監事、2021年春 瑞宝中級章叙勲。

脇田久伸先生がこの度本会名誉会員に御推挙されましたこと、心よりお祝い申し上げますとともに、先生の今後のますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。また、先生のご元で長くご指導を受けたものとして、先生のご研究と人となりをご披露できることは大変光栄に存じます。

筆者が初めて脇田先生に研究のご指導を受けたのは、分析化学研究室に4年生として配属された1988年で、それから現在に至るまで30年以上様々な事柄においてご指導を賜っています。先生のご専門は分析化学研究室に講師として着任されるまでは、主に鉱物中の希土類元素の分析でしたが、着任後はX線分析に関する研究を斬新な発想に基づき、活発に展開されました。

初めに、1970年代に先生は溶液内のイオンや分子の構造を解析する手法を確立するために、X線回折装置を自作されました。その後、当時はまだ国内では普及していなかった、スウェーデンの動径分布解析法のプログラムを改良し解析することで、従来では測定できなかった溶液中の陽イオンと陰イオンの結合における濃度、温度依存性を明らかにし、分析化学の発展に努められました。また、1980年代には、空素配位金属錯体中の金属イオンの局所構造や電子構造をX線吸収スペクトルによって解明する研究に取り組みました。従来、シンクロトン光施設でしか測定できなかったX線吸収スペクトルを研究室で測定可能とする自作のX線吸収スペクトル測定装置を開発することを始められました。その後、得られたX線吸収スペクトルを解析するためにDV-X α 分子軌道法を導入することで、空素配位金属錯体の溶液の持つ色や電氣的・磁氣的性質が溶液中のイオン・分子のナノレベルにおける構造に拠ることを初めて



明らかにされました。さらに、これらの研究に続き、生体試料や機能性物質に含まれる軽金属の局所構造や電子構造を明らかにする研究を始められました。この研究ではまず、Liイオンの軟X線吸収スペクトルを実験室で測定可能な装置を開発されました。そしてこの装置が放射光施設で得られる軟X線吸収スペクトルと同程度の精度でスペクトルを与えることを明らかにされました。さらに、水溶液中のナトリウムイオンやマグネシウムイオンの軟X線吸収スペクトル測定を放射光施設で可能にする溶液セルの開発を行うなど、X線分析の分野で先駆的なさまざまな研究をされてきました。

先生は温厚で包容力があり、誰からも慕われるお人柄をされています。私と過ごした30数年の中で怒られているところを見たことはほとんどありません。また、細かなことに拘わられることはなく、研究や教育においても自由に活動できる環境を与えていただきました。先生は興味を持たれる分野がとても広く、分析化学の分野だけでなく歴史学や考古学などの文系研究者とも積極的に交流されており、かなり広い人間関係を構築されています。そのため、研究のアドバイスをいただくときには、先生の広い人脈がなせる技なのか様々な分野からのアイデアをお持ちで、私が全く考えもつかないような観点から意義深い提案をこれまで何度もいただくことができました。

脇田先生は福岡大学を定年退官後も、佐賀大学シンクロトン光研究センター特命教授、名古屋大学未来社会創造機構招聘教授として分析化学の研究に携わられる一方、考古学の分野にも造詣を深められており、この分野で科研費の獲得をされ、現在も活発に研究を行っておられます。この衰えない学問への探究心には頭が下がる思いがします。最後に、先生には奥様と一緒にますますお元気でありますようお願いいたしますとともに、さらなるご指導を賜りますようお願い申し上げます。

(福岡大学理学部 栗崎 敏)